

補章 少子化の国際比較

1 世界の人口と出生率の推移

国際連合の推計によると、世界の人口は1950年には約25億人であったが、その後人口は増加を続け、2003年には約63億人に達している。2050年には89億人に達する見通しである。

世界平均の合計特殊出生率は、1950年代前半には5の水準であったが、その後低下傾向に入り、2000年までのデータを基にした現在の推計値では2.69と、過去50年間で最も低い水準となっている。

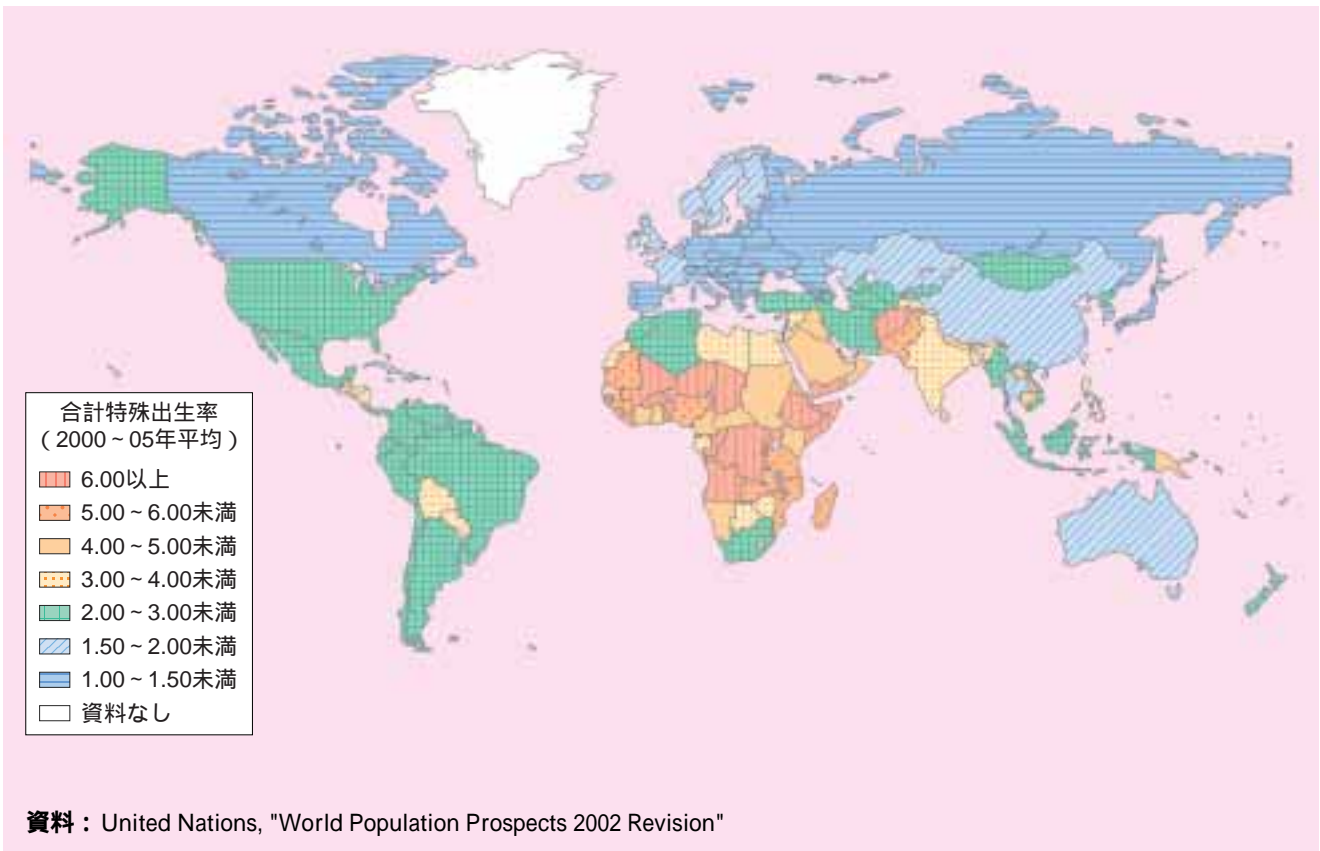
2 世界の地域別の出生率

世界の合計特殊出生率を地域区別にみると、アフリカが4.91と最も高く、次いでアジア(2.55)、ラテンアメリカ(2.53)の順となっており、ヨーロッパ(1.38)や北アメリカ(2.05)では、人口置き換え水準を下回っている。

3 先進国の出生率の動向

1960年代以降、先進国の合計特殊出生率は全体的に低下する傾向にあり、「少産少子」の時代から、「第2の人口転換」の時代に至っている。

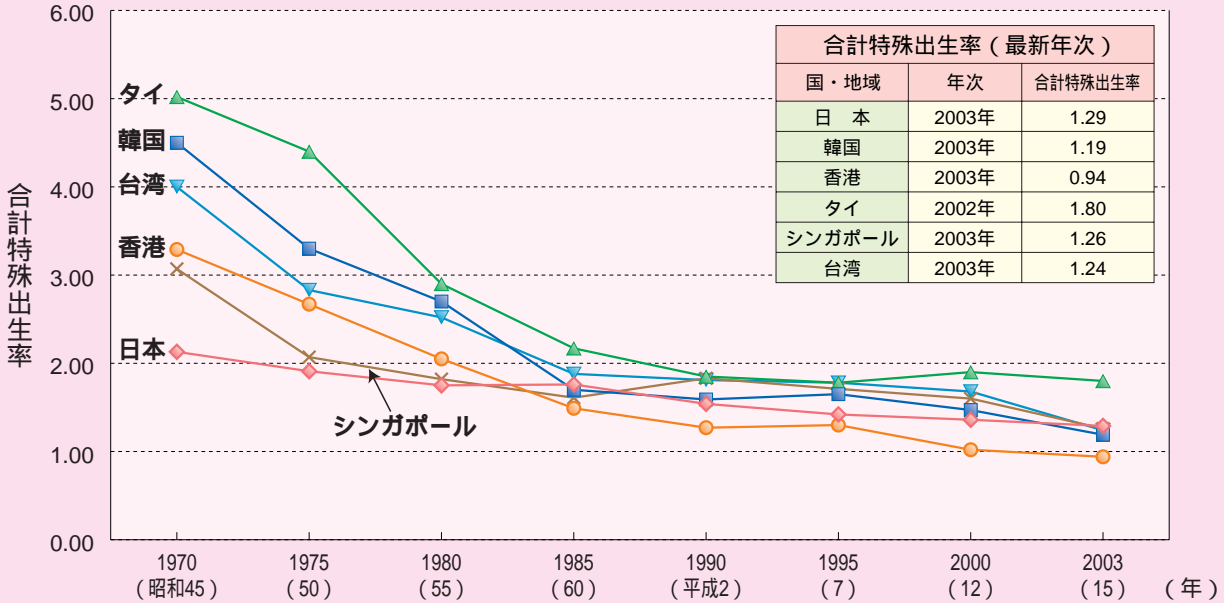
第1-補-3図 世界各国・地域の合計特殊出生率



4 アジアにおける国際比較

アジアでも合計特殊出生率が2.00を下回っている国が2割程度存在する。その中で、経済成長が著しい国々では合計特殊出生率の低下が急激であり、タイ1.80、台湾1.24、シンガポール1.26、韓国1.19、香港0.94と、日本よりも低い国がみられる。

第1-補-8図 アジアの主な国・地域における合計特殊出生率の動き



資料：United Nations "Demographic Yearbook", ただし、日本は厚生労働省「人口動態統計」、韓国は韓国統計庁資料。香港の1975年以降は香港統計局資料、タイの1995年以降はタイ王国統計局資料。シンガポールはシンガポール統計局資料、台湾は内政部資料。タイの2003年については、2002年のデータ